

# 日本における音楽コンクールの現状と意義：地域との関わりと関与者に焦点を当てて

西岡, 怜那

<https://hdl.handle.net/2324/7363800>

---

出版情報 : Kyushu University, 2024, 博士 (芸術工学), 課程博士  
バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)



氏 名	西岡怜那			
論 文 名	日本における音楽コンクールの現状と意義 ——地域との関わりと関与者に焦点を当てて			
論文調査委員	主 査	九州大学	准教授	西田 紘子
	副 査	九州大学	准教授	長津 結一郎
	副 査	昭和音楽大学	教授	石田 麻子

## 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、日本におけるコンクール運営の現状を概観し、なかでも地域組織によって開催されているコンクールの事例研究を行うことで地域との関わりによる運営の実態と関与者にとっての意義、課題、可能性を検討することを目的としている。コンクール研究は近年盛んになりつつあるが、運営者や地域との関わりという観点をとるものは僅少であり、その点で本研究は開拓的な意義を有すると考えられる。

序論では、コンクールの語源や機能、国際音楽コンクール世界連盟の変遷という本研究の前提となる事柄について整理されている。コンクールに関する先行研究とともに、関連分野である日本の音楽祭に関する研究、芸術における競争に関する研究に触れたのち、運営側の実態に照準する本研究の立場が定められている。

第1章では、クラシック音楽のコンクールの歴史や構造、意義、批判に関する議論がまとめられている。重要な指摘として、コンクールは、音楽家の発掘育成という一義的目的に限らず、多様な要素や人材が相互作用する社会的プロセス、文化的枠組みとして捉え直すべきであることが挙げられる。近年、出場者が増加している点を根拠として、入賞が大きな目標であるとともに、コンクールに出場することで得られる学びが重視されているという仮説が提示された。

第2章では、日本におけるコンクール文化の変遷が辿られ、コロナ禍がコンクール史において転換期になったことが指摘されている。こうした歴史を踏まえたうえで、現在、日本で開催されている259のコンクールを分析し、運営の現状が説明されている。なかでも自治体が主催する28のコンクールは、自治体主体型と地域住民主体型に大別された。また、音楽祭の現状と比較することで、コンクールと音楽祭は、日本のクラシック音楽文化が発展した1980年代から90年代に多数設立され、その多くが地域活性を目的としていたという。

第3章と第4章は、ボランティアが運営に携わり、地域との関わりによって開催されている4つのコンクールの事例研究となっており、自治体主体型コンクール、地域住民主体型コンクールがそれぞれ2事例ずつとり上げられている。直接的な関与者といえるボランティア、聴衆、出場者を対象とし、参与観察、アンケート調査やインタビュー調査を通して多角的な実態調査が行われており、これらを通して実態、各対象者にとっての意義と課題が考察されている。運営の実態に関しては自治体主体型と地域住民主体型の違いが導き出されており、聴衆である市民の90%以上が地域におけるコンクールの意義や自身のプライドに公的な見解を示している。そのほか、通常のコンサートにはないコンクール特有の魅力や既存の聴衆に留まらない関心喚起力が示唆されている。また、地域住民ボランティアについては、運営を担うという「提供」の立場だけでなく、自己実現、国際文化

交流、地域社会、音楽文化という意義を「享受」する立場も兼ねており、音楽面と直接関連しない意義も確認された。出場者については、「入賞しキャリアを積む」という目的は、大きいながらも絶対的ではなく、コンクールでの評価や経験、他者からの刺激、音楽面の成長、音楽面に限らない成長など、様々な意義が認められた。とりわけすべての事例において、音楽面に限らない成長という項目に40%程度の回答があったという結果は、コンクールの多義的な可能性を感じさせるものである。反面、運営人材の高齢化という課題や、また、コンクールの存続にあたっては地域住民の認知と参加を増やしていく必要性も抽出された。

結論では、これらの結果を総括するかたちで、コンクールにおける地域の関与者の相互関係が可視化された。コンクールは文化的包摂の場としての役割も果たし、音楽の専門的な領域とそれ以外の領域との架け橋になるという点に展望が見出されている。

審査では、石田麻子教授から、本研究の学術的意義や構成上の特徴、一定の匿名性を保ったうえでの議論構築の意図、本研究においてコロナ禍の実態の比重が大きい点、コロナ禍を転換期とすることの具体的な理由、「敷居が高い」などの言葉遣い、自治体とボランティアとの関わり方や自治体の目的とコンクールの波及効果の整合性をめぐる具体的な方策、学際的な手法への発展の内実、McCormick が示した枠組みに各コンクールを当てはめたときの特徴の違い、先行研究で示された社会的パフォーマンスモデルに基づく本研究の成果のモデル化、市民側や地元企業側の考察の必要、自治体と市民の距離とその示し方などの質問やコメントが寄せられた。

長津結一郎准教授から、演奏者における音楽面以外のモチベーションの内実、演奏者にとっての地域との関わり、結論で示した図における一般市民の位置づけ、運営組織の高齢化と人材不足の文化政策的な展望、クラシック音楽になじみがない人との接点づくり、McCormick の先行研究と本研究の結果との関係強化の必要、運営者・聴衆・演奏者の意識のずれの可視化、各事例コンクールの音楽的レベル、地域とコンクールの因果関係（影響を与える方向）などの質問やコメントが寄せられた。審査員からのこれらの指摘に対して、現時点までの調査結果から、そして今後模索すべき観点や提案可能な方策を含め、おおむね適切に応答がなされた。

以上の審査を通して、本論文は博士（芸術工学）の学位に値するものと判定された。